



2017 漁港漁場漁村海岸写真コンクール入賞作品

「寒鰯の水揚げ」

広田 和夫さん (山口県野波瀬漁港)

CONTENTS

平成29年度我が国周辺水域の資源評価について	2
	増殖推進部 漁場資源課
大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT) の年次会合の結果について	4
	資源管理部 国際課
平成29年11月分のプレスリリース	8

平成29年度我が国周辺水域の資源評価について

増殖推進部 漁場資源課

水産庁は、我が国周辺水域の主要な水産資源の資源評価結果を取りまとめ、11月17日に「平成29年度我が国周辺水域の水産資源評価」として公表しました。

<我が国周辺水域の水産資源評価について>

水産庁では、水産資源の適切な保存及び管理に資するため、国立研究開発法人 水産研究・教育機構や都道府県水産試験研究機関等からなる共同実施機関への事業委託により、毎年、我が国周辺水域における主要な水産資源の資源評価を行っています。

資源評価対象魚種は、海洋生物資源の保存及び管理に関する法律（平成8年法律第77号）に基づく、漁獲可能量（TAC：Total Allowable Catch）制度の対象魚種であるマイワシ、マアジ、サバ類等を含む50魚種84系群^{*1}です。そのうち78系群について、資源評価が取りまとめられましたので、結果を公表しました^{*2}。

資源評価では、魚種（系群）ごとに資源の状態（水準・動向^{*3}）を判断し、TACの設定の基礎となる生物学的許容漁獲量（ABC：Allowable Biological Catch）を提示します。

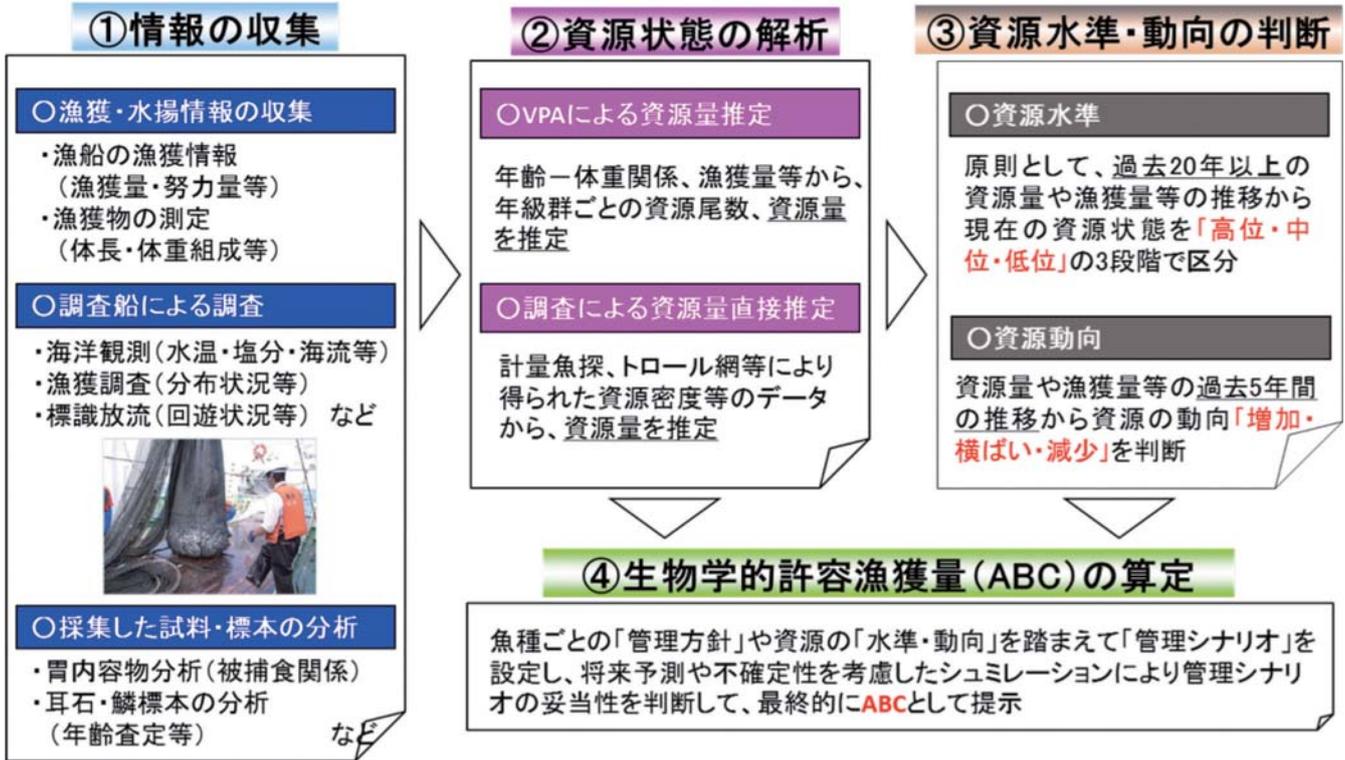
- ※1 系群：一つの魚種の中で、産卵場、産卵期、回遊経路などの生活史が同じ集団。資源変動の基本単位
- ※2 マサバ太平洋系群、ゴマサバ太平洋系群、スルメイカ冬季・秋季発生系群、ホッケ道北系群、ブリの6系群については現在資源評価中であり、結果は平成30年1月に公表予定
- ※3 水準は過去20年以上にわたる資源量や漁獲量等の推移から「高位・中位・低位」の3段階で区分し、動向は過去5年間の資源量や漁獲量等の推移から「増加・横ばい・減少」の3段階で区分

<資源評価の進め方>

資源評価にあたっては、漁獲量や漁獲努力量といった漁業を通じて得られる情報のほか、調査船を用いた漁業に依存しない情報、市場での漁獲物の体長・体重測定、胃内容物調査、耳石分析なども行い、様々な情報を集めます。

これらの情報の解析により資源量や親魚量を推定し、資源水準・動向を判断するとともに、資源水準が回復措置を講ずる水準以下にある資源については回復が見込めるABCを、適切な水準にある資源については持続的な利用が期待できるABCを算定します。

こうして作成された資源評価案は、全国6箇所で開催される「ブロック資源評価会議」において、有識者や都道府県水産試験研究機関等の関係者により、使用したデータや評価方法が適切であるかが議論されます。TAC魚種については、パブリックコメントも実施し、広く国民の皆さまからの意見を聴取します。今年度は、7～9月にブロック資源評価会議を開催しました。資源評価の透明性を確保するため、会議は公開で開催しています。

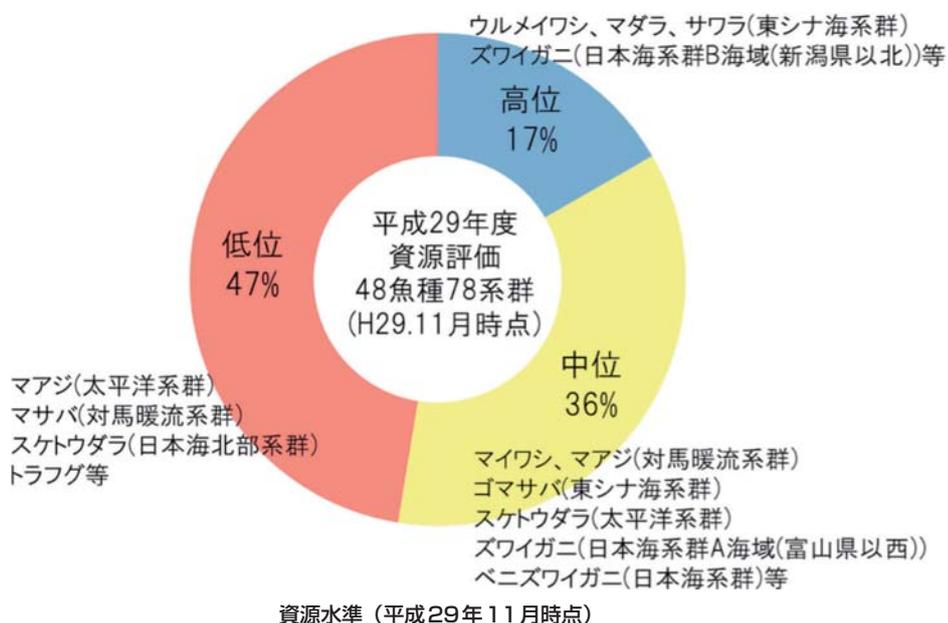


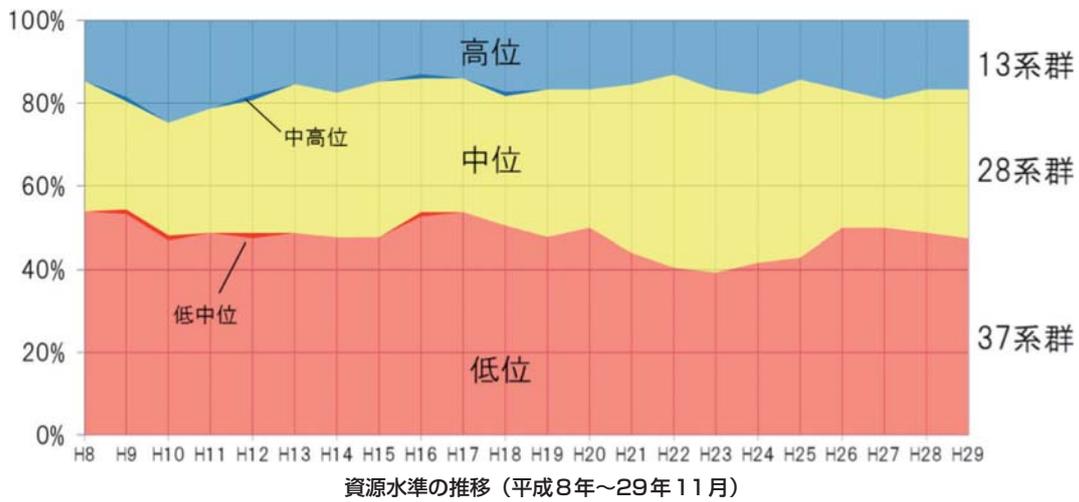
資源評価の概要

<平成29年度資源評価の概要>

資源評価が取りまとめられた78系群のうち、資源水準が「高位」のものが13系群（昨年度14系群）、「中位」のものが28系群（同29系群）、「低位」のものが37系群（同41系群）でした。このうち、TAC魚種について見ると、「高位」のものが1系群（同2系群）、「中位」のものが10系群（同11系群）、「低位」のものが4系群（同6系群）でした。

我が国周辺水域の水産資源は、高位又は中位水準にあるものが約半数を占めているものの、残りの約半数は依然として低位水準にとどまっております。これら資源の回復に向け、今後も資源評価を踏まえた資源管理を的確に行っていくことが重要です。





各魚種・系群の資源評価の概要（ダイジェスト版）を、以下のURLで公表しています。資源評価の詳細を掲載した報告書（詳細版）については、平成30年3月頃に公表予定です。

「わが国周辺の水産資源の現状を知るために」

<http://abchan.fra.go.jp/>

資源評価は毎年、関係する多くの方々との参画により取りまとめられています。水産庁では、今後も皆さまからのご意見を聴く場を設け、より高精度な資源評価を目指してまいります。また、資源評価の結果や手法、資源の状態を皆さまに丁寧に説明し、ご理解を得ていきたいと考えております。

魚種	系群	水準・動向	
		H28年度	H29年度
マイワシ	太平洋系群	中位 ↑	中位 ↓
	対馬暖流系群	中位 →	中位 →
マアジ	太平洋系群	中位 ↓	低位 ↓
	対馬暖流系群	中位 ↑	中位 ↓
マサバ	太平洋系群	中位 ↑	(評価中)
	対馬暖流系群	低位 ↓	低位 ↓
ゴマサバ	太平洋系群	高位 ↓	(評価中)
	東シナ海系群	中位 ↓	中位 →
スケトウダラ	日本海北部系群	低位 →	低位 →
	根室海峡	低位 →	低位 ↓
	オホーツク海南部	低位 ↓	中位 ↓
	太平洋系群	中位 ↓	中位 ↓
ズワイガニ	オホーツク海系群	低位 ↓	中位 ↓
	太平洋北部系群	中位 →	中位 →
	日本海系群A海域	中位 →	中位 →
スルメイカ	日本海系群B海域	高位 →	高位 →
	北海道西部系群	中位 →	中位 →
マアナゴ	冬季発生系群	低位 ↓	(評価中)
	秋季発生系群	中位 ↓	(評価中)
ウルメイワシ	伊勢・三河湾	低位 →	低位 →
	太平洋系群	高位 ↑	高位 →
ニシン	対馬暖流系群	中位 →	高位 ↑
	北海道	低位 →	中位 ↑
カタチチワシ	太平洋系群	低位 ↓	低位 ↓
	瀬戸内海系群	中位 →	中位 →
ニギス	対馬暖流系群	低位 →	低位 →
	日本海系群	中位 →	中位 →
イトヒキダラ	太平洋系群	中位 ↑	低位 →
	太平洋系群	中位 →	中位 →

魚種	系群	水準・動向	
		H28年度	H29年度
マダラ	北海道	高位 →	高位 ↓
	太平洋北部系群	高位 ↑	高位 ↓
キアンコウ	日本海系群	高位 →	高位 →
キンメダイ	太平洋北部	中位 →	中位 ↑
キチジ	太平洋系群 ^(注2)	低位 ↓	低位 ↓
	オホーツク海系群	低位 ↓	低位 ↓
	道東・道南	低位 ↓	低位 ↓
ホッケ	太平洋北部	高位 ↑	高位 ↑
	根室海峡・道東・日高・胆振	低位 ↓	低位 ↓
アマダイ類	道北系群	低位 ↓	(評価中)
	道南系群	低位 ↓	低位 ↓
ブリ	東シナ海	低位 ↓	低位 →
ムロアジ類	東シナ海	低位 ↓	低位 →
マチ類	奄美・沖縄・先島 アオダイ	低位 ↓	低位 ↓
	奄美・沖縄・先島 ヒメダイ	低位 ↓	低位 ↓
	奄美・沖縄・先島 オオヒメ	低位 →	低位 →
	奄美・沖縄・先島 ハマダイ	低位 →	低位 ↓
マダイ	瀬戸内海東部系群	高位 ↑	高位 ↑
	瀬戸内海中・西部系群	高位 →	中位 ↓
キダイ	日本海西部・東シナ海系群	低位 →	低位 ↓
ハタハタ	日本海西部系群	中位 →	中位 ↑
	日本海北部系群	中位 →	中位 ↑
イカナゴ類	宗谷海峡	中位 →	低位 →
	伊勢・三河湾系群	低位 ↓	低位 ↓
イカナゴ	瀬戸内海東部系群	中位 →	低位 ↓
タチウオ	伊勢・三河湾系群	低位 ↓	低位 ↓
サワラ	日本海・東シナ海系群	低位 →	低位 →
	東シナ海系群	高位 →	高位 →
	瀬戸内海系群	低位 ↓	中位 ↑

魚種	系群	水準・動向	
		H28年度	H29年度
ヒラメ	太平洋北部系群	高位 ↑	高位 ↑
	瀬戸内海系群	中位 →	中位 ↓
	日本海北・中部系群	低位 →	低位 ↓
	日本海西部・東シナ海系群	中位 ↓	中位 →
サメガレイ	太平洋北部	低位 ↓	低位 →
ムシガレイ	日本海系群	低位 →	低位 →
ソウハチ	日本海系群	中位 ↓	中位 →
	北海道北部系群	中位 →	中位 →
アカガレイ	日本海系群	中位 →	中位 →
ヤナギムシガレイ	太平洋北部	高位 ↑	高位 ↑
マガレイ	北海道北部系群	低位 →	中位 →
	日本海系群	低位 ↓	低位 ↓
ウマツラハギ	日本海・東シナ海系群	低位 →	低位 →
トラフグ	日本海・東シナ海・瀬戸内海系群	低位 ↓	低位 ↓
	伊勢・三河湾系群	低位 ↓	低位 ↓
	東シナ海 ハモ	低位 ↓	低位 ↓
東シナ海底魚類	東シナ海 マナガツオ類	低位 ↓	低位 ↓
	東シナ海 エソ類	低位 →	低位 ↓
	東シナ海 カレイ類	低位 ↓	低位 ↓
ホッコクアカエビ	日本海系群	高位 ↑	高位 ↑
シャコ	伊勢・三河湾系群	低位 →	中位 →
ベニズワイガニ	日本海系群	中位 →	中位 →
ケンサキイカ	日本海・東シナ海系群	低位 ↓	低位 ↓
ヤリイカ	太平洋系群	中位 ↓	中位 ↓
	対馬暖流系群	低位 ↓	低位 ↓

注1: 緑色は、TAC対象の7魚種19系群
 注2: サンマについては平成28年度から本資源評価では取り扱わない
 ※水準: 過去20年以上にわたる資源量や漁獲量等の推移から「高位・中位・低位」の3段階で区分
 ※動向: 過去5年間の資源量や漁獲量等の推移から「増加・横ばい・減少」の3段階で区分

大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）の年次会合の結果について

資源管理部 国際課

（はじめに）

大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）は、大西洋における高度回遊性魚種（マグロ、カツオ及びカジキ類）の保存管理を目的とする地域漁業管理機関であり、年次会合を開催して保存管理措置を決定しています。加盟国・地域は、日本、米国、カナダ、ブラジル、中国、南アフリカ、EU等の52加盟国・地域です。

2017年11月14日から21日まで、モロッコ王国のマラケシュにおいてICCAT年次会合が開催されました。我が国からは、太田水産庁資源管理部審議官（我が国代表）、宮原農林水産省顧問をはじめ、水産庁、外務省、経済産業省、国立研究開発法人水産研究・教育機構及び漁業関係団体の関係者が出席しました。今年の年次会合の主な結果は次のとおりです。

Ⅰ. 大西洋クロマグロの保存管理措置

東西の資源について、今年のICCAT科学委員会（SCRS）からは総漁獲可能量（TAC）を増加させることを可能とする勧告が出されたことを踏まえ、保存管理措置について議論が行われ、東資源については、2020年まで段階的にTACを36,000トンまで増加させることが、西資源については、2020年までのTACを毎年2,350トンとすることが合意されました。東西資源のTACと主要国の割当量については、以下のとおりです。

【東資源】

単位：トン

	2018年	2019年	2020年	(参考) 2017年
TAC	28,200	32,240	36,000	23,655
うち、日本	2,279	2,528	2,801	1,930.88
EU	15,850	17,536	19,360	13,451.36
モロッコ	2,578	2,892	3,219	2,152.71
チュニジア	2,115	2,344	2,590	1,791.00
留保枠	5	650	750	—

※科学委員会の勧告を踏まえ、各年のTACをレビュー。

2019年及び2020年の留保枠について、資源状態等を踏まえて各国への追加配分を今後検討。

【西資源】

単位：トン

	2018年	2019年	2020年	(参考) 2017年
TAC	2,350	2,350	2,350	2,000
うち、日本	407.48	407.48	407.48	345.74
米国	1,247.86	1,247.86	1,247.86	1,058.79
カナダ	515.59	515.59	515.59	437.47

※科学委員会の勧告を踏まえ、各年のTACをレビュー

II. アオザメの保存管理措置

北資源については、過剰漁獲を食い止め資源を回復させるためには漁獲量を500トン以下にすべきとの今年のICCAT科学委員会（SCRS）からの勧告を踏まえ議論が行われたところ、オブザーバー乗船等の一部の例外を除き、原則漁獲禁止とし、2019年に新たな措置を検討することが合意されました。

南資源については、今年のICCAT科学委員会（SCRS）から年間漁獲量が2011年～2015年の最低漁獲量（2,001トン）を超えないようにすべきとの勧告が出されていましたが、新たな保存管理措置の採択は見送られました。

III. その他の事項

次回の年次会合は、2018年11月にクロアチアで開催される予定です。

（おわりに）

今年のICCAT科学委員会（SCRS）からの勧告に基づき、東西両資源ともに大西洋クロマグロのTACを増加させることとなり、東資源については、2020年にはこれまでで最大のTAC（36,000トン）が設定されました。この結果が示すように、しっかりとした資源管理に取り組めば資源は回復することが期待されます。我が国としては、世界有数のマグロの漁業国・消費国として、資源の持続的利用のため、引き続きリーダーシップを発揮して対応していきます。

〈●会議場のホテルの外観〉



〈●会議場の風景〉



発表年月日	発表事項名	担当課
H29.11.2	「平成29年度新北西太平洋鯨類科学調査（太平洋側沿岸域調査）」の終了について	国際課
H29.11.9	「平成29年度新南極海鯨類科学調査」の実施について	国際課
H29.11.10	「大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）年次会合（第25回通常会合）」の開催について	国際課
H29.11.10	「日キリバス漁業協議」の開催について	国際課
H29.11.14	「北方四島周辺水域における日本漁船の操業枠組み協定」に基づく日口政府間協議及び民間交渉の開催について	国際課
H29.11.16	「魚の国のしあわせ」プロジェクト実証事業団体の取組内容の発表について	企画課
H29.11.16	「日キリバス漁業協議」の結果について	国際課
H29.11.17	水産庁漁業調査船 開洋丸による九州西南海域宝石サンゴ漁場環境調査結果について	漁場資源課
H29.11.17	平成29年度 我が国周辺水域の水産資源評価の公表について	漁場資源課
H29.11.21	「水産政策審議会 第74回 企画部会」及び「水産政策審議会 第85回 資源管理分科会」の開催及び一般傍聴について	漁政課
H29.11.22	第18回日中漁業共同委員会第3回準備会合の開催について	国際課
H29.11.22	「北方四島周辺水域における日本漁船の操業枠組み協定」に基づく日口政府間協議及び民間交渉の結果について	国際課
H29.11.22	「大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）年次会合（第25回通常会合）」の結果について	国際課
H29.11.24	「南東大西洋漁業機関（SEAFO）第14回年次会合」の開催について	国際課
H29.11.24	「日口漁業委員会第34回会議」の開催について	国際課
H29.11.29	中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）第14回年次会合の開催について	国際課

編集後記 窓辺のカーテン

今年も「漁政の窓」をお読みいただきありがとうございました。

「漁政の窓」では、皆様の声を大切に満足して頂けるように取り組んで参りますので、引き続きご理解と御協力をお願いいたしますとともに、今後とも水産庁施策についてわかりやすくお伝えできるよう努めていきますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

ご意見やご質問がありましたら、以下をお願いいたします。

編集・発行 水産庁漁政部漁政課広報班

水産庁施策情報誌 漁政の窓

〒100-8907 東京都千代田区霞が関1-2-1 合同庁舎1号館8階

代表 03-3502-8111（内線6505）

URL <http://www.jfa.maff.go.jp/>

ご意見 ご質問はこちらへ → URL <http://www.maff.go.jp/j/apply/recp/index.html>